

平成15年3月25日判決宣告
仙台高等裁判所平成14年(う)第142号 殺人, 死体遺棄被告事件
(原審 福島地方裁判所平成14年(わ)第3号, 平成14年7月19日判決宣告)

主 文
原判決中被告人に関する部分を破棄する。
被告人を懲役6年に処する。
原審における未決勾留日数中130日をその刑に算入する。

- 理 由
- 第1 本件控訴の趣意は、弁護人角山正が提出した控訴趣意書に記載のとおりであるから、これを認める。
- 論旨は、量刑不当の主張であるが、要するに、①被告人が長男の殺害を依頼するに至った総論、原判決のいうように自己保身のためとはいえないこと、②共犯者のAに金を払って長男の殺害を依頼した経緯も、長男に散々悩まされていた被告人が、共犯者のAから持ちかけられて、溺れる者もつかむ心境からその話に乗ったもので、必ずしも確定的に長男を殺したいという意思を有したものではないこと、③格別共犯者を督促して実行に及ばせたということはないこと、④長男の殺害を確認した際も、犯行の発覚を恐れて徹底してその処分を求めたということではなく、むしろ半信半疑のまま死体を見たに過ぎず、そのため憐憫の情も湧く余裕もなかったことなどを理由に、原判決の量刑の認定には疑問があり、被告人を懲役9年に処した原判決の量刑は重すぎる、というのである。
- 第2 記録を調査し、当審における事実取調べの結果も併せて検討する。
- 1 本件は、当時83歳の母親が、放とうと暴力を繰り返す長男に長年にわたり悩まされ続けた経緯の報酬と引き替えに長男を殺害してやるとの話に乗り、1000万円近い報酬を支払って、長男を殺害しその死体を見つからず処分してくれるよう頼み、依頼を受けた共犯者にお金を渡し、その死体を山中に埋めて遺棄した、という衝撃的で悲惨な事案である。
- 被告人が長男殺害等を依頼するに至る原因と経緯については後に判示するが、長年にわたる心と暴力に耐えきれずに思い余った末とはいえ、人の殺害を図ることが社会的に許されるような重大な犯罪であることはいうまでもなく、憎しみと恐怖の対象でしかなかった長男ではあるが、は、共犯者から多額の報酬の支払いを条件に長男殺害の話を持ちかけられると、さしてちゅうをすることなくその話に応じ、報酬の支払いと引き替えに長男の殺害を依頼したものであり、その長男の死亡を願って共犯者に報酬金を支払いつつ殺害の実行を促し、被告人の考えを知った次からは馬鹿なことをしないように言われたにもかかわらず、もはや殺害しかないといい、行を待ったものであり、さらに、長男の死を確かめるために死体の確認までも要求しているのから、被告人の行いは、その原因と経緯には酌量すべきものがあるが、狂気の沙汰としかいえない。共犯者は、長男を飲みに連れ出して、無警戒の長男の背後からいきなり襲いかかり、金トで頭部を殴打し、長男が倒れ込んだところをなおも金属バットで頭部を殴りつけて殺害したとあり、犯行態様は残忍である。結果はもとより重大であり、自身に大いに責められるべき点かはいえ、長男は無惨な形で殺害され、その遺体を山中に埋められたものであり、誠に哀れである。被告人は、長男の死体を目の当たりにしながら、自己の犯罪を悔いることもなく、ただ自己の犯行を恐れるのみであったものであり、公判になっても、犯罪に引き込まれたとして共犯者を非難責任を転嫁し、我が子の死を悼み自己の責任を省みる様子はなく、人の生命を奪ったことに反省の情が余りうかがわれないのである。したがって、被告人の刑事責任は重いといわざるを得ない。
- 2 しかしながら、被告人が、長男の死を望み、ついには本件に至った原因、経緯には酌むべき少なからずあるといえるのであり、その原因、経緯は、原判決も(犯行に至る経緯)において判示するところであるが、以下のとおりである。
- 被告人は、昭和19年1月に農家のBと後妻として結婚し、夫及びその両親の義父母とともに営みつつ、二男二女をもうけ、いわゆる農家の嫁として苦労を重ねたが、昭和34年12月突然交通事故で死亡してからは、なおその苦労が大きくなり、ただ自分の責任でB家の先祖代地を守らなければとの思いでひたすら働き、家業の農業に従事しあるいは行商も行うなどして一つで夫と前妻との子も含め子供5人を育て上げた。しかし、長男(昭和22年2月8日生)は、家の跡取りということで祖父母に甘やかされて育ったせいもあって、中学校を卒業したものの農業に従事するでもなく、まともに仕事をせず、ただ金を無心しては酒やかけ事等にふけるような日々を送り、その上、素行が悪く暴力団と関係を持ち、長期間家を出て所在も分からなくなり、刑事事件を起こして刑務所に服役するといったことを、しばしば繰り返していた。被告人は、長男の死を前に、B家の土地を跡取りとして長男が相続することになれば、たちまち処分された家の土地はなくなってしまうものと考え、それを防ぐため、土地の大半を次男に相続させることになり、昭和49年ころに長男が刑務所に服役中に、B家の土地の大部分を次男名義にした。刑務所が

[illegible]

第3 によって、刑訴法397条1項、381条により原判決を破棄し、同法400条ただし書により被告事件について更に次のとおり判決する。

原判決が認定した各事実に原判決と同一の法令を適用し（刑種の選択、併合罪の処理を含む）
処断刑期の範囲内で、上記の理由により被告人を懲役6年に処し、刑法21条を適用して原審
る未決勾留日数中130日をその刑に算入することとし、原審及び当審における訴訟費用を被
負担させないことにつき刑訴法181条1項ただし書を適用して、主文のとおり判決する。

仙台高等裁判所第1刑事部

裁判長裁判官	松	浦	繁
裁判官	根	本	涉

裁判官春名郁子は異動のため署名押印することができない。

裁判長裁判官	松	浦	繁
--------	---	---	---